都市内河川周辺における散歩行動に関する研究

A study on stroll behavior around urban river

熊本大学大学院自然科学研究科社会環境工学専攻　095d8840　吉田　幸平

1. 序論

近年，社会の成熟に伴い，散歩行動に配慮した空間整備の重要性が増している．また，河川空間は治水・利水機能だけでなく通風や日照の確保など都市空間における貴重な自然空間として注目され，散歩においても魅力的な場所として利用されている．そこで，本研究では都市内河川に着目し，散歩行動と都市内河川の関係について考察することを目的とする．

2. 仮説とアンケート設計

散歩に関する仮説を立て，それを検証するためにアンケート設計を行った．散歩は，まず主目的が決まりそれに従って行動が起こる．この主目的と行動の間には様々な個人的な要素や外的な要素が加わる．また，行動を開始した後にも空間的な要素や他の活動といった要素が影響を及ぼす．この空間的な要素の代表として水辺を考える．普段散歩者が水辺に持っている意識や水辺空間と散歩とは，相互に影響を与えると考えられる．さらには，地域の散歩行動を明らかにすることで，その地域社会の特徴を読み取ることができるのではないかと考えられる．

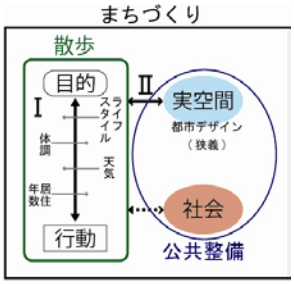

図１　仮説の概略図

3. アンケート調査の実施概要

対象地を，「①都市内河川を有している．」「②中心市街地活性化基本計画と景観計画を策定している．」「③都市内河川周辺で特徴的な整備を行っている．」という３つの基準から選定した．その結果，宮崎市大淀川周辺，熊本市白川周辺，鹿児島市甲突川周辺の３地区を対象地に選定した．宮崎では，先行研究で行ったアンケート調査結果を用いた．アンケートの回収率は，宮崎が 34.7%，熊本が 24.2%，鹿児島が 21.3%である．なお，熊本と鹿児島では，「水辺への意識」の項目を新設した．

4. ３地域における散歩行動の分析

３地域の散歩行動の特徴を単純集計や多変量解析を用いて明らかにした．これにより，図 1 の「目的（思考）と行動の関係（矢印Ⅰ）」を明らかにしたといえる．

4.1 散歩行動特性に関する３地域の比較

「個人属性」と「散歩行動特性」に加え，経路の形状について，有意差の検定(有意水準 5%)を行った．その結果，有意差のあった項目などから明らかになった3地域の特徴は，表１の通りである．

表１　３地域の散歩行動の特徴

	特徴
熊本	健康維持目的の散歩でも，運動要素が多い散歩ではなく，中頻度で，観察なども伴うような散歩が他地域より多い．
鹿児島	散歩を日課としての運動と捉える散歩者と，気分転換の手段と捉える散歩者が，どちらに偏ることなく存在している．
宮崎	目的とは関係なく，散歩を家族，特に夫婦で行う日課として，日常生活の一部と捉え，励行的に行っている散歩者が多い．

4.2 散歩者の分類による３地域の特徴

全散歩者の「目的」「頻度」「種類」「同伴者」「時間」「経路形状」をカテゴリーとして数量化Ⅲ類を適用し，得られたサンプルスコアを用いてクラスター分析を行った．その結果，7グループに分類された．表 2 は各グループの構成率である．これらの結果からも，表 1 の特徴を裏付けることができた．つまり，各地域でどういう目的(思考)の人がどのような散歩を行なっているかを明らかにした．

表２　散歩行動の分類の構成率

	3地域		熊本		鹿児島		宮崎	
運動型(同伴者，長時間)	173	29.9%	24	18.5%	29	24.0%	120	29.9%
気分転換型	133	23.0%	27	20.8%	36	29.8%	70	23.0%
運動型(一人，短時間)	114	19.7%	41	31.5%	24	19.8%	49	19.7%
観察型	56	9.7%	18	13.8%	15	12.4%	23	9.7%
犬の散歩型	53	9.2%	8	6.2%	8	6.6%	37	9.2%
コミュニケーション型	26	4.5%	4	3.1%	2	1.7%	20	4.5%
息抜き型	23	4.0%	8	6.2%	7	5.8%	8	4.0%
合　計	578	100%	130	100%	121	100%	327	100%

5. 散歩行動と水辺との関係の分析

散歩行動と外部環境の代表例としての都市内河川との関係を明らかにした．つまり，図 1 の「散歩と実空間の関係（矢印Ⅱ）」を明らかにしたといえる．

まず，２地域の水辺に対する意識と，散歩行動から散歩では，普段の生活の中での河川への接触度合とは逆の傾向を示すということが分かった．次に，白川のように川幅が広く，両岸で雰囲気の異なる空間を持つ場合は，両岸に経路を持ち循環する散歩者が多い．一方，鹿児島のように川幅が狭く，両岸の雰囲気がよく似ている場合は，どちらか一方だけを直線的に歩く散歩者が増える．

6.結論

一部ではあるが，散歩行動を通して，住民の河川との関わり方を読み取ることができた．今後は，散歩がまちづくりの重要なツールとなる為に，散歩を通してその地域社会を読み解くことが可能となるように一般化を行なっていくことが，本研究の課題である．